

# 流技能実習

～オイスカの目指すもう一つの人材育成～



昨今、わが国では高齢化や業界における担い手不足などにより海外から労働者を雇い入れる企業が増え、技能実習生の数も年々増加しています。海外人材に頼らざるを得ない状況の中、技能実習制度を安易に活用して人材を確保する企業もあり、大きな問題となっています。

オイスカは創立以来、ふるさとや国の発展を担う「人づくり」の活動を続け、技能実習制度が発足する以前から、「委託研修」という形でオイスカ会員の農家や企業と共に、専門分野の技能を習得するための人材育成に取り組んできました。オイスカの目指す「人づくり」のあり方から、技能実習の今を見つめ直します。

## What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立され、現在36の国と地域に組織を持つ国際協力NGOです。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

## OISCAの標章



オイスカの世界観がこの標章に象徴的に表されています。天(青)、火(赤)、水(水色)、地(黄)、それにこの4要素を調和的に活動させ、人類万物のいのちを生成発展させる源である「宇宙」を表す黒です。

## OISCAという名称の意味

O rganization	機構
I ndustrial	産業
S piritual	精神
C ultural	文化
A dvancement	促進

人間の生存に不可欠な三要素「産業・精神・文化」のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

## 今月の表紙写真

Photo by Koichi Kataoka

実習先の株式会社浜名ワークスで、半自動溶接の作業を行うイアン(フィリピン)。技術、安全管理、仕事に対する姿勢……技能実習で学ぶことは知識だけではありません。

(静岡県浜松市)

# 特集 オイスカ

## 技能実習制度の今

技能実習制度（以下、制度）とは「我が国が先進国としての役割を果たしつつ国際社会との調和ある発展を図っていくため、技能、技術又は知識の開発途上国等への移転を図り、開発途上国等の経済発展を担う『人づくり』に協力すること」厚生労働省HP）を目的に、1993年に創設さ

れた制度です。

技能実習には企業単独型と団体監理型があります。団体監理型では、非営利の監理団体と、技術指導を行う実習実施者とが連携して技能実習生（以下、実習生）を受け入れ、監理団体は、実習が「国際協力」の目的のもとに行われているかどうか、実習実施者の監理、指導を行います。

また、2016年の法改正

により、最長3年間だった実習期間が、翌17年からは5年間まで延長できるようになり（ただし監理団体と実習実施者が優良と認められ、実習生が技能検定随時3級を合格した場合のみ）、より高い技術の習得を目指せるようになりました。

日本国内において担い手や労働者不足が叫ばれ、実習生の人数が36万7千人を超える



など、技能実習に対する注目が高まる一方、低賃金や長時間労働、それに伴う実習生の失踪などの課題も見られるようになりました。これに対し、上記法改正では技能実習の適正な実施と実習生の保護を図るため、外国人技能実習機構を設立するなどの措置が講じられています。しかしながら、報道などで技能実習の負の側面が取りざたされるこ

とも多く、技能実習本来の目的がおろそかにされていることも課題となっています。

## オイスカの技能実習

### 原型は委託研修

オイスカが日本国内で行う海外人材の育成には、大きく分けて「研修」と「技能実習」の2つがあります。「研修」は、農業を中心とした技術指導をオイスカの研修センターで行

※法務省HP（19年6月時点データ）より



合格しないと、  
技能実習2年目に  
進めないぞ！

帰国?!

技能検定試験「冷凍空気調和機器施工基礎2級」を受検  
11月27日

技能検定試験合格！  
12月15日



入国後講習修了式



# 技能実習プログラム

技能実習生は、どのような過程を経て実習を進めていくのでしょうか。オイスカと受け入れ企業の動きは？  
本年2月に帰国したマレーシアからの実習生、ジクリとアミンのスケジュールを例に、来日前から帰国後までの流れをまとめてみました。

- 送出機関  
マラ公団 (マレーシア政府の地方地域開発省下部組織)
- 監理団体  
公益財団法人オイスカ
- 実習実施者  
有限会社 清明エンジニアリング (静岡県)
- 技能実習科目  
冷凍空気調和機器施工
- 実習生  
MUHAMAD ZIKRI BIN MOHD RIZA (愛称：ジクリ)  
AMEEN LOQMAN BIN ZAINUDIN (愛称：アミン)



ジクリ(左)とアミン

## 2017—1年目

## 2016—来日前

### 入社後

日本語、日本での生活、交通法規、実習で使用する基本用語などの習得を支援

### 入国後

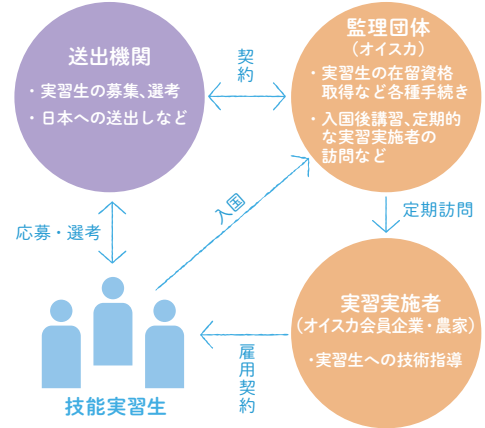
住民登録  
宿舎の確保、雇用前健康診断、労働関係法規や入管法令などを学ぶセミナーの実施

- 1 受け入れ人数と時期の検討
- 2 現地で候補者の面接・選考  
渡航前健康診断の実施
- 3 技能実習1号実習計画認定申請書類を作成し、外国人技能実習機構※に計画認定を申請
- 4 機構認定後、在留資格認定証明書交付申請書を作成し、出入国在留管理局に提出  
在留資格「技能実習1号」を取得

※技能実習の適正な実施と技能実習生の保護を図ることを目的として、技能実習計画の認定や技能実習生に対する相談・支援などを行う、法務省および厚生労働省が所管する認可法人

## 企業・オイスカ

### 技能実習制度における各機関の主な役割 (オイスカの場合)



うもので「技能実習」は、オイスカの理念に賛同する企業や農家が実習生を受け入れ、指導を行うものです。  
オイスカが海外の青年を最初に受け入れた63年当時は、技術指導は全て外部に委託し、現在の「技能実習」に近い形で設立されたからもそれは変わらず、センターは宿舎として機能するほかは、日本語や生活に関する指導が主でした。70年代に入り、センターの農場や指導員の充実が図られ、オイスカ独自の農業の「研修」が始まってからも、工業分野や畜産、果樹栽培といった専

# 実習生



現地法人で働くアミン。先輩実習生OBと共に頑張っています

同社現地法人に就職し、日本で修得した技術・技能や日本語能力を活かした職務に就く

3月2日



2月3日  
修了式  
&  
帰国!

日本語能力試験 N3 を受験  
12月1日

20年1月29日  
学科・実技試験合格!  
厚生労働省認定の3級  
技能士の資格を取得  
(ジクリ)

19年11月18日  
実技試験合格!  
(アミン)

技能実習検定試験「冷凍空調和機器施工 随時3級」を受検  
11月18日

冷凍空調和機器施工の専門的な施工技術の習得を開始  
2月14日



銅管の溶接技術を学ぶ(ジクリ)



12月30日～19年1月1日  
長野県白馬に  
スキー旅行

日本語能力試験 N4 を受験  
12月2日

冷凍空調和機器施工の専門的な施工技術の習得を開始  
2月14日



1月5日  
会社の安全  
祈願祭に参加

## 2020 — 帰国後



天井エアコンの施工(アミン)

実習実施者として、現地法人の業務サポートと技術支援を継続

帰国手続き

受験対策を実施

実技・学科試験の  
受験対策を実施



技能検定実技課題(ジクリ)

在留資格「技能実習2号」を更新

在留資格更新を申請

受験対策を実施

在留資格「技能実習2号」を取得

毎月オイスカ担当者による巡回指導/3ヵ月ごとに監査・外部監査

### 有限会社 清明エンジニアリング

- 業種：空調設備業
- 業務内容：一般設備工事/冷暖房設備工事/給排水衛生設備工事/プラント設備工事/電気設備工事/ビルディング付帯設備工事
- 代表取締役：鈴木宏昭
- 従業員：19名(オイスカの実習生6名含む)  
※2020年4月1日現在
- 創業：1993年10月1日

門分野については「委託研修」と位置づけ、企業や農家で指導を行ってきました。04年からは、一部の「委託研修」を「技能実習」に変更。その後、制度の充実に伴い、11年には全ての「委託研修」を「技能実習」にシフトして現在に至ります。

### 入国後講習に自信!

実習生は来日後、実習をスタートさせるまでの2ヵ月間、日本の生活や社会に適應できるよう、言葉や文化、習慣などを学ぶための「入国後講習」(以下、講習)の受講が義務付けられています。オイスカでは、研修センターで培ってきた日本語や生活指導のノウハウを活かした講習を実施。さまざまな国籍の研修生と実習生が一緒に点呼や清掃、食事の準備を行うなど、合宿スタイルでの生活を通し、規律の精神やコミュニケーション力の向上を図っています。

こうしたオイスカならではの講習が、ほかの監理団体の目に留まり、講習を委託されることも増えています。

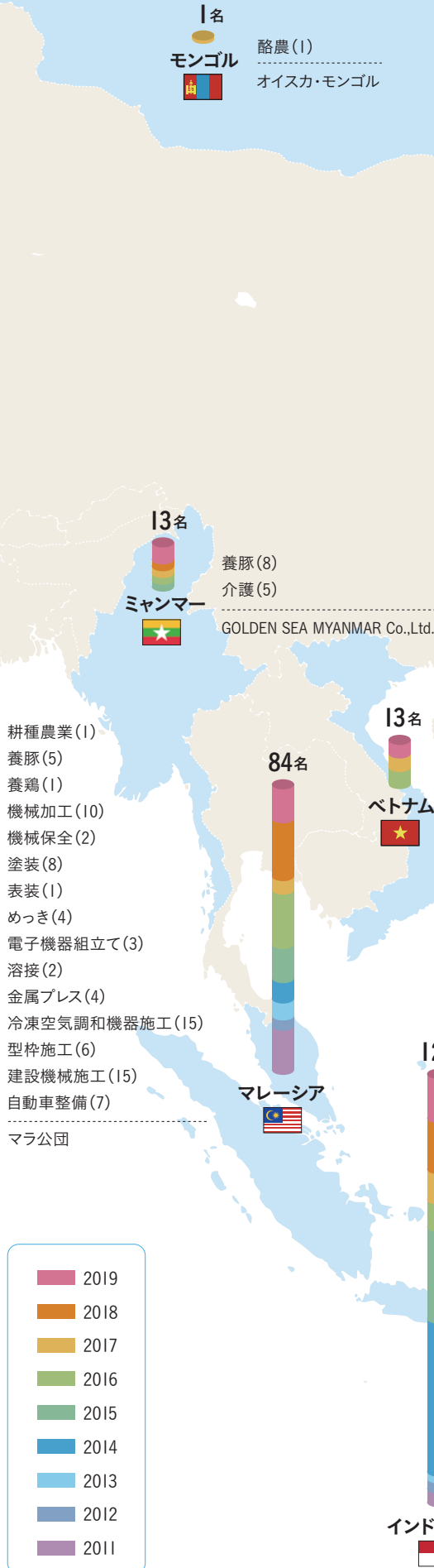
※既定の日本語習得のある者は、1ヵ月に短縮することも認められている

# 国別技能実習生受け入れ実績・送出機関

## 2011～2019年

これまでに**8カ国**から**476名**の技能実習生を受け入れました

※地図上には2017年の新制度移行後の受け入れ国のみ表示。 Bangladeshは12年に1名、スリランカは15年までに37名、の受け入れ実績あり  
 ※オイスカ・インドも送出機関に認定されているが、現在までの受け入れ実績はなし



### 送出機関担当者の想い



**マラ公団 研修部長 マハザン・テー**  
 マラ公団では、1967年にオイスカと協力協定を締結し、当公団の職業訓練学校の卒業生を日本の企業で受け入れていただてきました。その数は3千名を超えます。  
 日本での実習の大きな目的は、技術習得はもちろんですが、日本人の働く姿勢、規律などの価値観や起業家精神を学ぶことにあります。マラ公団としては、実習生の帰国後の就職率の向上を目指すとともに、今後は環境や教育などの分野でもマレーシアの青年たちが学べることを期待しています。



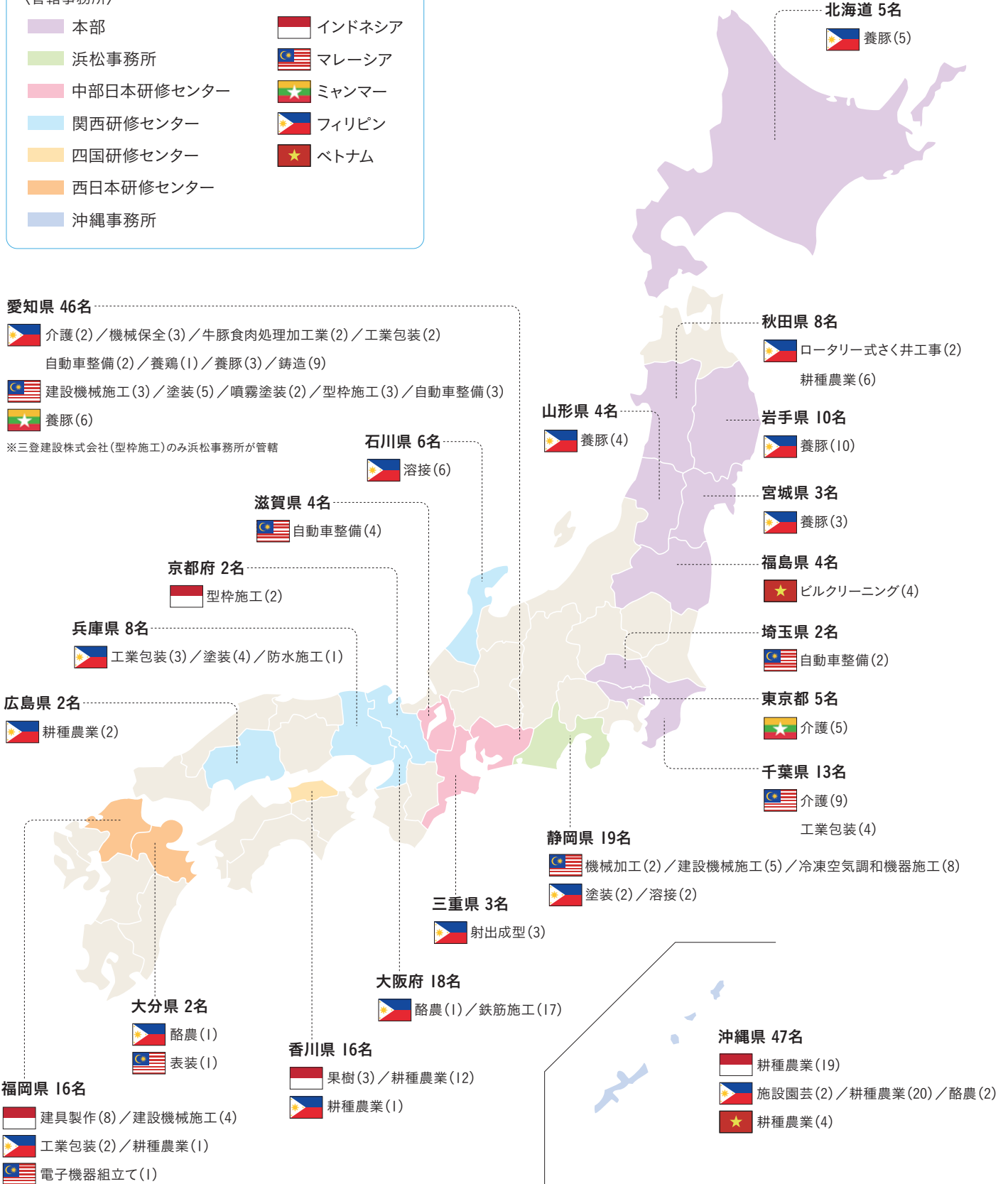
# 現在の都道府県別技能実習生受け入れ数

2020年2月現在

現在22都道府県の82の受け入れ先で、  
38業種、243名の実習生が技術の習得に励んでいます

〈管轄事務所〉

■ 本部	■ インドネシア
■ 浜松事務所	■ マレーシア
■ 中部日本研修センター	■ ミャンマー
■ 関西研修センター	■ フィリピン
■ 四国研修センター	■ ベトナム
■ 西日本研修センター	
■ 沖縄事務所	



## オイスカの「人づくり」の現場から

オイスカが進める「人づくり」の理念を理解し、多くの実習生の指導をして下さっている受け入れ先の皆さま、日々技能の習得に励む実習生やその経験を活かして母国で活躍するOB、そしてオイスカの担当者……。  
オイスカの技能実習における人材育成の現場から、さまざまな「声」を集めました。



株竹内農場



株オークマ

### 〈実習実施者と実習生の声〉

#### 技術だけでない “人”としての成長を

株竹内農場（香川県／耕種農業）  
竹内一之さん

株式会社竹内農場では、30年以上前から委託研修生を、2012年からは技能実習生を受け入れていきます。現在まで20名を超える海外の青年たちと共に学んでまいりました。私が小学生の頃から研修生と寝食を共にし、家族のような関係を続けています。すべての研修生、実習生が良き兄であり、友達であり、今は息子といった関係がしつくりくるような気がします。

当社は農業生産法人で、主力のキャベツをはじめ複数の野菜の生産販売を行っています。実習生には、栽培ノウハウを習得して自国に持ち帰ってほしいです。しかし、農業を行う環境は全く違っており、ノウハウが活かせる場面は限られるのも現状です。技術だけでなく、普遍的な人間性や仕事への取り組み意識、思いやりなど、人間にとって一番大切な部分を一緒に学び、習得してくれればと思っています。

す。

実習で3年間を共にした彼らが帰国するときは、家族との別れのように非常に寂しいですが、母国での活躍を応援して送り出しています。また最近では、同じ農業を志した皆と、彼らの国と一緒に農業ができたらどんなに楽しいだろうとよく思うようになりました。ときには厳しく、どんなときも愛情を忘れない、そんな家族のような関係を続けることで、実習生たちの人生を応援し続けたいと思います。

#### DARWIN SIRAJUNTAK

（愛称：ダルウィン／インドネシア）  
●18年11月～21年11月

最初は日本語が難しく、会話や作業に苦労しましたが、社員の皆さまが支えてくださり実習に励むことができています。インドネシアとは違い、日本では機械を使う作業が多いです。実習中、私もよく機械を使いますが、難しいです。上手にできたときは嬉しいです。また、日本人はいつも時間を見て行動し、作業が早いです。私も身につけられるように頑張っています。実習を

始めて1年になりますが、まだ1人で全ての作業をすることができません。みんなから仕事を任せてもらえるようになります。そして修了後は、母国でキャベツ栽培ができるようになります。

#### 互いに学び合ひ、 共に取り組む

株オークマ（福岡県）/ 建具製作  
代表取締役社長 大隈賢一郎さん

株式会社オークマは明治44年創業以来、福岡県朝倉市を拠点に、住宅用内装ドアなど人々の暮らしに密接につながる建築部材の製造、販売を行っている企業です。

弊社は18年1月に4名、19年5月に同じく4名、計8名の実習生を受け入れています。初めは日本の気候や習慣に慣れず、ぎこちない面もありましたが、作業自体の覚えも早く、日本語も通訳なしで理解できるので、すぐに従業員とも打ち解けたようです。また、彼らは自分たちで知識を習得しようと努力していますので、日本人スタッフのほうが、彼らから学ぶことが多いのが実



情です。ほかに、親睦会や忘年会にも積極的に参加し、母国の踊りを披露してくれたら、休日には同僚と魚釣りやバーベキューに行ったり、地域のボランティア活動にもよく取り組んでくれています。

実習で学んだ技術、経験をぜひ母国で活かし、今後、弊社が東南アジアに進出するようなことがあれば、母国との懸け橋の一端を担っていただきたいと考えています。

**LATHIUDIN  
AMTHIUDIN**

(愛称：ラティブ/インドネシア)  
●17年10月～20年11月

の不注意で指先にけがをし、入院したことがあります。その時、会社の社長、会長さまをはじめ、たくさんの方々が会社にお見舞いに来てくれました。とても嬉しく、会社に戻ってからは一層安全に気を付けるようになりました。

今年の11月で3年間の実習が終わりますが、できればあと2年間延長して、技術だけでなく、会社の運営や経営についても学びたいです。

〈実習生OBの声〉  
**多くの経験と  
確かな技術を得て**

**MOHDFATURRAHMAN  
BINMOHDFARID**  
(愛称：ラハン/マレーシア)  
樹正興電機製作所(福岡県)/電子機器組立て

でも、日本の生活や文化などたくさんのことを学びました。本当に楽しかったです！これらの貴重な体験と学びは、マラ公団(送出機関)と株式会社正興電機製作所、オイスカのおかげで得られたものです。皆さまには心から感謝しております。本当にありがとうございました。

帰国後は、正興エレクトロニクスアジア(マレーシア)で働いています。技術者として責任を持ち、異常が発生しないように、全ての施設と機械の状態を管理しています。また、改善できることはないかと常に考え、業務にあたっています。



西日本研修センターでの基礎講習では、優しい先生と元気な友達がいたので寂しくありませんでした。センターの皆は私の家族です

業務以外では、昨年11月から毎週金曜日に社内では日本語の授業を開始しました。7ヵ月間で20人の参加者に基本的な日本語を教えます。思ったより参加者が多く、楽しんで教えています。実習したことで現在の業務には違いはありますが、知識や技能のほかに、作業時に必ず再確認することなど、仕事への向き合い方も、日本で学んだことを活かせる場はたくさんあります。これらは製品の品質を保ち、作業に対する自信にもつながり、日々のモチベーションを高めることに役立っています。これからもいろいろなことを経験して、いろいろなことが教えられる”を目標に頑張っていきます。これからも皆さまのご指導をお願いします。

**“モダン農業を  
ふるさとへ**

**ARIFERFAN  
ERFENDI**

(愛称：エルファン/インドネシア)  
仲西栄二(沖縄県)/耕種農業

私は、12年にスカブミ研修センターで9ヵ月間農業研修を受け、14年に技能実習生に

なるチャンスももらいました。とても嬉しかったです。来日してから2ヵ月間は、中部日本研修センターで日本語や日本の文化、農業を勉強しました。ここで学んだ日本の規律に感動しました。最初はとても大変でしたが、少しずつ慣れ、時間を守ることの大切さなど規律の意味も分かりました。いつも私たちに優しく教えてくれたセンターの先生たちに感謝しています。

研修が終わると、私は沖縄の仲西栄二さんの農場で勉強しました。仲西お父さんは



自分のメロン畑です。研修生にもメロン栽培の指導をしています



でも優しくていい人です。農場ではトマト、枝豆、にんじん、セロリ、小松菜、きゅうり、唐辛子をつくっています。お父さんから畑の準備や管理、中でも肥料や栄養をあげることに、害虫対策、収穫など、たくさんさんの技術を教えてもらいました。日本の農業はモダンでもとても素晴らしいです。

17年に帰国し、オイスカ・インドネシアがバニユワンギ県で新たに運営することになった農業技術研究センターで、2年間指導にあたりました。インドネシアの今の若い人たちは、体力的に厳しい割に収入がないと思っているのが、農業にあまり興味がありません。だから私が若い人たちに日本で学んだ現代的な農業の仕方を教えました。農業は生活のためにとても大事です。私が教えた研修生が、自分のふるさとでリーダーになってほしいと思います。

今、私はふるさとの自分の畑で農業をしながら、村の農家にも指導を行っています。70haの畑ではお米、みかん、スイカ、メロン、大豆を育てています。特にメロンは大きな会社と協力して生産し、ス

ーパーに出荷しています。将来、インドネシアの農業が日本の農業のように良くなってほしいと思います。日本での体験は、今も私の原動力となっています。

### 〈オイスカ担当者の声〉

## 連絡を密に、帰国まで無事に

瀬長浩／沖縄事務所所長代行

ハイサイ グスーヨーチ ユーウガナビラ（こんにちは皆さん いかがお過ごしですか）



現在沖縄事務所では、約50名の技能実習生の受け入れ監理業務を行っています。沖縄本島の糸満市、恩納町、南城市、離島の伊是名村、久米島町、南大東村、宮古島市の広範囲で、インドネシアやフィリピン、ベトナムの実習生たちが、耕種農業と畜産農業の実習に取り組んでいます。ちなみに、南大東村と宮古島市は直線にして、およそ600km離れています。東京駅から新大阪駅までの直線距離が約400kmですから、その範囲の広さがお分かりいただけると思います。

沖縄事務所では、実習生の入国から1年間、1ヵ月に1回以上、2年目以降は3ヵ月に1回以上のペースで受け入れ先企業や農家さんを訪問し、実習実施者の巡回指導を行っています。実習生一人ひとりの日々の実習や生活の指導は受け入れ先で管理していますが、私たちも実習生たちの様子をいつも気にかけています。私は、実習生たちが



南大東島の実習生たちと

来沖するとまず最初に、フェイスブックのメッセージ機能などで気軽に連絡が取り合えるようにしています。彼らには、何か質問や困ったことがあれば、いつでも連絡してくださいと伝えていきます。また、実習生がSNSに投稿する情報を通じて、皆の近況を確認することもあります。

夢いっぱい、期待に胸を膨らませて来日した実習生たちです。日本での生活でいろいろな経験を積んでほしいと思います。私たちの一番大切な役目は、そんな実習生たちの帰りを待ちわびている親兄弟、奥さん、子ども、恋人のもとに、成長した彼らを無事に帰すことだと考えています。

\*\*\*\*\*

オイスカの技能実習は、ふるさとの発展に貢献する「人づくり」を目的に、受け入れ先企業や農家、オイスカ担当者、そして実習生自身の強い思いによって実施されています。しかし〈実習実施者の声〉にもある通り、実習生によっては日本と母国の気候や社会環境の違いから、実習で学んだことをそのまま活かすことが難しいという課題もあります。

一方、送出国には自国の青年たちに、働く姿勢、規律、起業家精神など、日本人の価値観に触れて学んでほしいというニーズもあり、技術だけでなく人間性そのものの成長をも重視した実習を、実習実施者と共に進めています。また現在、より近い気候条件での実習実施を希望するオイスカ・モンゴル総局が、北海道支部との連携を進め、道内にてモンゴル実習生の受け入れができるよう調整が行われるなどの動きもあります。実習生が帰国後さらに力を発揮できるよう、今後オイスカならではの「人づくり」に取り組みしていきます。



## トヨタファーム／養豚（愛知県支部法人会員）



鋤柄さん親子と現在お世話になっている実習生

1984年から現在まで、途切れることなくオイスカからの「委託研修生」、「技能実習生」を受け入れているトヨタファーム。前身の堤畜産を立ち上げた鋤柄耕一さんと、現在トヨタファームの代表を務める鋤柄雄一さんは、父子2代にわたり多くの研修生や実習生の指導を続けているだけでなく、彼らの帰国後の活動を、さまざまな形で支援をしています。今年で受け入れ36年目となる今、どのような思いで海外の青年を育ててこられたのか、お二人にお話を伺ってきました。

### 家族のように一委託研修時代

オイスカを知ったのは、研修生を短期のホームステイで迎え入れていたという親戚の紹介だったそうです。耕一さんに委託研修生を受け入れはじめた理由を尋ねると、「人手不足だったから」と一言。しかし、トヨタファーム（当時堤畜産）が運営する、つつみ食堂の上階を研修生の宿舎として貸し出し、仕事はもちろん食事も一緒。朝から晩まで共に過ごし、養豚の技術指導を厳しく行う一方、どの研修生も冬には必ずスキーに連れて行くなど、研修生を家族のように思っていたと言います。初めての受け入れから一貫して、単なる労働力として接するのではなく、「人づくり」を自然体で行ってこられたことが伝わってきました。また、研修生も耕一さんを「おとうさん」と呼び、帰国後も手紙が届くなど（写真①）、研修で得たものが技術だけではなく、技術だけではないことがうかがえました。

### 帰国後の活躍の場をつくる

鋤柄さん親子による「人づくり」への思いは、研修生や実習生の将来にもわたっています。父耕一さんは、帰国後も研修生をサポートしたいという思いから、フィリピンのパラワンとバゴの両研修センターに豚舎を建て、自らも何度も足を運んで、現地の研修生を指導されました。

そして、跡を継いだ雄一さんも、2015年からミャンマーの技能実習生を受け入れ始めたことから同国へ足を運び（写真②）、18年にはセンター近隣の農村を視察。現地農家向けの養豚セミナーで講義を行い、翌年にはトヨタファームの職員をオイスカが企画したミャンマーツアーに参加させるなど、耕一さんの思いを受け継いで、実習生の将来やふるさとの発展をも見据えた支援を行っています。

また、トヨタファームの第一期実習生のゼーヤー・ゾーは、日本で得た知識と技術を活かし、帰国後に現地研

修センターの養豚指導員として活動する一方、ミャンマーの農村地域で初となる人工授精の普及に成功しています。これまでの委託研修生・実習生OBの活躍とともに、養豚によるミャンマーの農村開発への挑戦が少しずつ始まっています。

### 技能実習という「国際協力」

「オイスカには、各国にセンターやネットワークがあり、実習生が帰国してから活躍できる土壌がある」と雄一さん。帰国した実習生には「養豚で成功してほしい」「ふるさとの発展のためのリーダーになってほしい」と期待しています。その一方で、帰国して1年は、御礼奉公としてオイスカのセンターで働くようにと話しているそうです。そして、順次実習を修了したOBがそれを引き継ぎ、センターを基盤として技術が根付いて、さらなる人材が育つことも心にかけてくださっています。

技能実習制度は、もとより「国際協力」を目的としています。しかし、お二人は、その制度ができる以前から技術と精神を育て、各々の「ふるさと」の発展に寄与する人材を育成するというオイスカのビジョンと共鳴する形で、長らく海外の青年を指導しており、まさにオイスカが目指す「人づくり」の一つの理想の姿を実現されているように感じられました。



受け入れた全ての青年の情報をまとめた手作りのファイル。一人ひとりの写真とともに研修を終えた研修生からのメッセージが添えられ、どの文面にも「おとうさん」「ありがとうございました」の言葉が見られる



トヨタファームで短期研修を行った研修生OBと再会。研修は2週間と短かったにもかかわらず、学んだことを活かして帰国後も活躍の様子を見て、技能実習生のミャンマーからの受け入れを決めたという